

# 2024年 第1回 日本大学スポーツ科学部 ニューカッスル実地研修旅行報告書

## 2024 Report on the 1st Overseas Study Program to Newcastle, Nihon University College of Sport Sciences

山本 大<sup>a</sup>

Yamamoto Dai<sup>a</sup>

キーワード：オーストラリア，スポーツ，英語

### 1. はじめに

本稿は、日本大学スポーツ科学部が2024年9月にオーストラリアのニューカッスルで、大学および地域のスポーツ活動に参加し日本とオーストラリアのスポーツ文化を比較・検討することおよび異文化交流を目的に実施した海外実地研修旅行についてまとめたものである。



写真1 日本大学ニューカッスルキャンパス到着直後に危機管理学部とスポーツ科学部で記念撮影

### 2. 概要

2024年9月10日（火）から9月17日（火）までの全8日間、学生14名（男子7名、女子7名）と引率教員1名が、オーストラリア連邦のシドニーおよびニューカッスルを訪問した。スケジュールは以下の通りである（表1）。

### 3. 活動内容

#### 3.1 事前研修（7月19日・26日）

オーストラリアへの渡航前に2日間の事前学習を実施した。事前学習の目的は、海外実施研修に向けた準備を整えるとともに、日本とオーストラリアのスポーツ文化や健康管理に関する知識を深め、研修をより有意義にすることである。1回目の事前学習では、学生たちがグループワークを通じて現地での予定やスポーツ体験に関する知識を共有し、協力しながら準備を進めた。また講義形式で教員が学生たちに対し、参加予定のニューカッスル大学でのピラティスや男女混合タッチフットボール、サーフィンのビギナーセッション、さらにパークランについて説明を行った。また、学生たちには次回の事前学習に向けて、脳震盪に関する知識を日英両言語で学習することを求めた。2回目の事前学習では、学生たちは脳震盪に関するグループワークを行った後、オーストラリアと日本のスポーツ文化比較をテーマに、1980年から2020年にかけての女性のスポーツ参加に関する課題、現状、促進方法について理解を深めるため、関連論文や記事の要約と意見交換を行った。研修中のグループワークでは、両国のスポーツ文化の違いを比較するため、現地でのスポーツイベント参加、観察、インタビューを通じた調査を計画した。さらに、英語コミュニケーション能力の向上を目的とし、現地の人々との交流を必須とした。研修中は毎日、その日に参加者が得た知識や経験

<sup>a</sup> 日本大学スポーツ科学部  
College of sports science, Nihon University

表1 研修スケジュール

日本大学スポーツ科学部オーストラリア海外実施研修予定 (9/10~17)

9月	曜日	朝食		午前	昼食		午後	夕食	
		時間	場所		時間	場所		時間	場所
10-Jan	火曜日						東京(羽田)第3ターミナル 19:30 集合 3階 団体カウンター Y 近畿日本ツーリスト チケット:eチケット 22:00発 カンタス航空 QF60便		
11	水曜日			8:55 シドニー到着予定 ニューカッスル行きバス		貸切バス	14:00 キャンパスオリエン テーション 15:00 ニューカッ スルレイストエンドオリエン テーションウォーク キャンパスからフォアショア ノビーズ-ニューカッスルビー チ-キャンパス	19:00	(1)日本キャンパス
12	木曜日	6:30	(1)日本大学キャンパス	7:30 出発時間 キャラハンキャ ンバススポーツプレシントツ アー UoNシャトルバス ピラティスジムセッション		キャラハン キャンバス 各自	男女混合タッチラグビーセッ ション OR アルティメットフリ スビーセッション シャトルバスでキャンパスに戻 る	19:00	(2)日本キャンパス
13	金曜日	6:30	(2)日本大学キャンパス	8:00 出発時間 Nobbysビーチ ザーフスクールセッション ノビーズビーチまでは徒歩		市内 各自	13:00~15:00 ニューカッス ルナイツNRLトレーニング施設 訪問 施設見学 講義:脳震盪について「コンタ クトスポーツにおける頭部衝撃リ スク管理」	19:00	(3)日本キャンパス
14	土曜日	6:00	(3)日本大学キャンパス	7:00 出発時間 8:00 パークランストックトン (5km) フェリーまで徒歩 オールド・ニューカッスル・ス テーション・マーケットまで見 学(徒歩)		市内 各自	ブラックバット保護区 野生生物園訪問 17:00~19:00 NuSpace City Campusでバーベキュー		(4)バーベキュー
15	日曜日	7:00	(4)日本大学キャンパス	9:30~10:00 出発時間 12:00 女子ラグビー観戦 NRLW:@ゴスフォード クイーンズランド州カウボーイ ズVシドルースターズ		スタジアム 各自	シドニーへ移動		各自
16	月曜日		ホテル	自由時間		市内 各自	20:55PM シドニー出発 カンタス航空 QF025		各自
17	火曜日			東京(羽田)第3ターミナル 5:55到着予定					

を振り返り、自己評価を行うセッションを設けると同時に、各グループが収集したデータや資料に基づきレポートを作成し、クラス全体で研修の成果を共有することでフィードバックを得る機会を提供する場があることを説明した。以上のように、本事前学習は、現地に行く前に参加学生が現地の文化や環境を学び、スポーツ科学や健康管理に関する知識を深める機会を提供することを目的として実施した。

### 3.2 実地研修1日目(9月10日)

初日は深夜発のため、日本からオーストラリアへの移動のみとなった。羽田空港での出国時に問題が起こった。羽田空港では集合時に、1名の学生が交通機

関の乗り間違えにより30分程度の遅刻した。さらに、搭乗手続き中に1名の学生の電子渡航許可(Electronic Travel Authority: ETA)の期限切れが判明した。ETAはオーストラリア渡航に必須であり、有効期限は発行日から12ヶ月間である。当該学生は高校時代に取得したETAが有効であると誤認識していたため、このトラブルが発生した。ETAの再申請は「オーストラリアETAアプリ」を通じて行われ、認可までに最大12時間を要する可能性がある。本研修では、搭乗手続き終了直前に認可通知を受け取り、全員が出発できた。今回、事前にETAの有効期限の確認の必要性が明らかとなった。今後の研修では、これらの点に関するより綿密な事前指導が求められる。

### 3.3 実地研修 2日目 (9月11日)

研修2日目の本日が実質オーストラリア研修初日である。予定より早くシドニー国際空港 (Sydney Kingsford Smith Airport) に到着した。入国審査では、3名の学生が日本から持ち込んだ食品を没収される事態が発生し、事前説明の重要性が浮き彫りとなった。

10時過ぎに空港を出発し、バス内で昼食を取った後、12時30分に日本大学ニューカッスルキャンパス (以下「日本大学キャンパス」とする) に到着した。日本大学本部の国際化推進室職員2名が出迎え、施設の利用方法や注意事項について説明を行った。日本大学キャンパスは1892年に完成した歴史的建造物を改築したもので、文化遺産に登録されている。建物は中央の事務棟、左側の宿泊棟、右側の教育棟で構成されており、セキュリティ対策として物理錠と電子錠の二重システムを採用している。オリエンテーション後、参加者はニューカッスルビーチ (Newcastle Beach) を散策し、現地の生活や文化に触れる機会を得た。その後、グループワークを実施し、17時に夕食を取った。食事は日本人スタッフが担当し、朝夕2食を提供した。18時には近隣のスーパーマーケットでの買い物時間を設け、22時を門限として初日の活動を終了した。本研修の初日の活動は、参加者が現地の環境に順応し、研修に向けた準備を整えることを目的としており、概ね達成できたと思われる。



写真2 宿泊棟4階の部屋 キッチン・バス・トイレ・冷蔵庫などが完備されている



写真3 洗濯室の様子  
(上が乾燥機, 下が全自動の洗濯機)



写真4 キャンパスオリエンテーション  
(場所は宿泊棟にある食堂)



写真5 キャンパスツアー：事務棟にある裁判所跡地：  
地下には留置所がある



写真6 日本キャンパスのすぐ近くにあるニューカッスルビーチにて記念撮影

### 3.4 実地研修 3日目（9月12日）

3日目のニューカッスル大学キャラハンキャンパス（University of Newcastle, Callaghan campus：以下「キャラハンキャンパス」とする）における活動体験と現地学生との交流について以下の通り報告する。研修参加者は朝食後、現地コーディネーターのリチャード・レジャー氏（Mr. Richard Ledger：以下「リチャード氏」とする）の案内でキャラハンキャンパスに向かった。ニューカッスル大学は市の中心部に位置するシティキャンパス（City campus：以下「シティキャンパス」とする）とキャラハンキャンパスの2拠点を持つ。キャラハンキャンパスは、ニューカッスル中心地から12km離れた140ヘクタールの敷地に位置し、大学のメインキャンパスとして機能している。参加者はキャンパス内のスポーツ施設「フォーラム」（The Forum）で、午前中はスカルプトセッションに参加した。スカルプトは有酸素運動と筋力トレーニングを組み合わせたプログラムで、インストラクターの指導のもと、参加者は全身運動を行った。

昼食後、参加者はタッチラグビーセッションに参加した。このセッションでは、ニューカッスル大学の学生チームと合同で練習を行い、日豪の学生間交流が促進された。またオーストラリアのスポーツ文化に触れる機会として、参加者は大学施設内のプールを見学した。オーストラリアでは小学校にプールがないため、大学施設で水泳授業が行われている実態を観察することができた。本研修を通じて、参加者はオーストラリアのスポーツ文化や教育システムについて直接的な経験を得ることができた。特に、現地学生との交流は、言語能力の向上だけでなく、活動に対する積極的な行動や前向きな言動は日本の学生の反応とは大きく異



写真7 キャラハンキャンパスにある複合スポーツ施設の入り口

なっており、異文化との比較や理解の促進にも寄与したと考えられる。



写真8 スカルプトに取り組む学生たち



写真9 施設ツアーの説明を受けている。担当はニューカッスル大学の大学院生



写真10 一般学生用のトレーニングジム



写真11 室内50mプール



写真12 トップアスリート用の  
パフォーマンスセンター



写真13 授業の最後に現地学生と円陣を組む研修参加者

### 3.5 実地研修4日目（9月13日）

4日目の午前中は、ニューカッスル市のノビーズビーチ (Nobbys Beach) におけるサーフィン初心者向けの体験レッスンに参加した。ノビーズビーチはハンター川河口の砂州に位置し、独特の地形的特徴を有している。ノビーズビーチの北側にはハンター川河口を保護する防波堤が延びており、ビーチと港湾の双方を守っている。南側には小規模な岬状の丘が突出しており、南風を遮蔽する役割を果たしている。この地形的配置により、通常ノビーズビーチは比較的穏やかな波浪環境を形成している。当日は前夜からの暴風と強雨が継続し、朝食時にも断続的な降雨であった。風速は若干弱まったものの、ビーチに打ち寄せる波は依然として荒々しく見受けられた。しかしながら、リチャード氏によれば、波は荒々しく見えるものの、初心者がサーフィンを行うには適切な波の状態であるとの見解であった。学生たちは9時15分に日本大学キャンパスを出発し、約20分の徒歩でノビーズビーチに到着した。到着時、参加者は波が予想以上に高いと感じ、また気温の低さも相まって、サーフィンをすることに否定的な反応を示していた。

負傷のため参加できなかった学生1名を除き13名の学生は、専用のウェアとボードを借用し、2名の現地インストラクターの指導のもとサーフィンレッスンに参加した。指導は個別に行われ、砂浜で待機する他の参加者からの声援も加わり、協調的な学習環境が形成された。結果として、13名中9名の参加者がボード上に立つことに成功した。現地インストラクターは、参加者の成功を積極的に褒め、モチベーションを高めることに重点を置いていた。この体験は、異文化間のスポーツ指導法の違いを明確に示すとともに、海外研修がこうした教育方法の差異を直接体験する貴重な機会となることを示唆している。



写真14 サーフィンの講習の様子

サーフィンの体験レッスン後、寮で簡単な昼食を済ませた。午後からは危機管理学部の学生と共に、バスでニューカッスル国際スポーツセンター (Newcastle International Sports Centre: 以下「スポーツセンター」とする) に向かった。スポーツセンターは、ニューカッスル市街地から南西に位置する多目的スポーツ施設である。本施設は、地域のスポーツ振興と国際的なスポーツイベントの開催を目的として設立された。メインスタジアムは地域最大規模で約33,000人を収容可能であり、ラグビーリーグ、ラグビーユニオン、サッカーなど複数の競技に対応可能な設計となっている。付帯施設としてトレーニング施設や会議室など、アスリートの育成や各種イベントの開催に対応する設備を備えている。またプロスポーツチームの本拠地としてだけでなく、地域住民のスポーツ活動や健康増進など地域貢献の場としても機能している。学生たちは、これらの内容を施設管理者から説明を受けながら、スタジアム内を見学した。



写真15 ニューカッスル国際スポーツセンターの入り口。  
ネーミングライツされている



写真16 スタジアムの様子



写真17 選手の室内ウォーミングアップ会場。  
サンドバックが特徴的

その後、選手のロッカールームを利用して講義が行われた。当初、脳震盪に関する講義が予定されていたが、講義担当者からの提案により、より前向きなテーマである選手のリカバリーに内容が変更された。講義は英語で行われ、質疑応答も英語で実施された。これ



写真18 ロッカーに併設されている交代浴バス。  
立って入浴できるように深さがある



写真19 施設内にあるスポーツクリニック

は参加学生にとって言語面での課題となったが、講師はクイズ形式を取り入れるなど、全員が参加できるよう工夫を施した。この手法により、言語の壁を超えて学生の積極的な参加を促すことができた。講義終了後、数名の熱心な学生が講師に直接質問する機会があり、講師も長時間にわたって丁寧に対応した。このことは、講義内容が学生の知的好奇心を刺激し、さらな

る学習意欲を喚起したことを示唆している。本事例は、海外研修における柔軟な講義内容の調整と、参加型学習方法の導入が、言語の壁を超えた効果的な学習環境の構築に寄与することを示している。

### 3.6 実地研修 5日目（9月14日）

研修5日目、参加者は、ハンター川対岸のストックトン公園で開催されたパークランイベントに参加した。6時に朝食を摂取し、7時過ぎに寮を出発した。寮から徒歩15分程度の場所にあるクイーンズワーフ (Queens Wharf) フェリー乗り場のから5分程度の航行で対岸のストックトンワーフ (Stockton Wharf) に到着した。イベント開始前、参加者はパークランのルールについて主催者から説明を受けた。開会式では我々研修参加者が紹介され、さらに慈善活動への最高額寄付者が開会の挨拶を行った。これは、パークランが単なるスポーツイベントではなく、社会貢献活動としての側面も持つことを示唆している。ランニング開始後、参加者は様々な年齢層や背景を持つ人々が共にイベントを楽しむ様子を観察した。ボランティアスタッフや他の参加者からの積極的な声援は、オーストラリア人のホスピタリティを体現していると考えられる。この経験を通じて、学生たちはオーストラリア人のポジティブな態度や、日本とは異なるスポーツ文化を直接観察する機会を得た。このような異文化体験は、参加学生のスポーツに対する理解を深め、その社会的意義を再考する契機となったと推察される。



写真20 ハンター川フェリー。川にイルカも泳いでいる。少し上流の港には日本からの大型フェリーも入港する



写真21 パークランのスタートとゴール地点



写真22 全員が完走し、記念撮影



写真23 旧駅前広場のフリーマーケットの様子

その後、フェリーに乗ってクイーンズワーフに戻り、旧駅地を利用した広場で開催していたフリーマーケットに行き、現地の生活を観ることが出来た。

午後は、ブラックバットリザーブ (Blackbutt Reserve: 以下「リザーブ」とする) に路線バスを利用して向かった。リザーブは、ニューカッスル市内から車で約15分の距離にあるニューランプトンに位置する自然保護区である。園内は、Carnley ReserveとRichley Reserveの2つの主要エリアで構成されており、7つのウォーキングコースが整備されている。

Carnley Reserveには無料の動物園ワイルドライフ イグジビッツ (wildlife exhibits) が設置されており、コアラ、ウォンバット、カンガルー、エミューなどのオーストラリア固有の動物を観察できる。週末には爬虫類のショーが開催され、エミューへの餌やり体験も可能である。一方、Richley Reserveには大型遊具を備えたアドベンチャープレイグラウンドやバーベキューエリア、ピクニックエリアが整備されている。学生たちは、楽しみにしていたコアラが、最近亡くなったとの話を聞き、非常に残念がっていた。園内では、小さな子供たちを連れた家族連れが多くみられ、この公園が地域の憩いの場になっていることがうかがわれた。その後、寮には戻らず、シティキャンパスで開催された現地の方たちとの交流バーベキューに参加した。オーストラリアのバーベキュー文化の特徴とされるソーセージだけのメニューが提供され、学生たちも驚いていた。会場となった建物5階テラスの調理器具に不具合があったため、現地スタッフが1階の調理場で料理を準備し、参加者に提供するという柔軟な対応が見られた。参加者には、ニューカッスル大学スポーツ局のスタッフや現地の日本語クラブに所属するオーストラリア人が含まれており、英語と日本語を交えたコミュニケーションが行われた。現地参加者は、学生の言語能力に配慮し、理解しやすい表現を用いるなど、積極的な交流を促進する姿勢が見られた。

### 3.7 実地研修6日目(9月15日)

6日目は、シドニーへの移動日となった。午前中、参加者は寮の清掃と荷造りを行い、学生たちは現地コーディネーターであるリチャード氏への感謝を表すビデオメッセージを英語で作成した。出発前の最後の集まりでは、全員でこのビデオを鑑賞し、参加者たちは自身の言葉で思い出や感謝の気持ちを表現した。

本研修を通じて、オーストラリア人の外国人に対する寛容な態度<sup>1)</sup>が、英語力に自信のない学生たちのコミュニケーション意欲を高める重要な要因となったことが観察された。同様に、参加したスポーツイベントにおけるポジティブな声掛けや明るい雰囲気、最も顕著な異文化交流の機会を提供したと考えられる。これらの経験は、参加学生の異文化理解や国際的なコミュニケーションに対する姿勢に肯定的な影響を与え

た可能性が高い。特に、オーストラリアの文化に見られる肯定的なフィードバックや包括的な態度は、日本の教育環境とは異なる側面を提示し、学生たちの視野を広げる契機となったと推察される。そしてこの結果は、短期海外研修が参加者の異文化理解能力やコミュニケーションスキルの向上に寄与する可能性を示唆している。

シドニーへの移動途中、ゴスフォード (Gosford) で開催された女子プロラグビーリーグの試合を観戦した。オーストラリアには、オーストラリアンフットボール (Australian Football)、ラグビーユニオン (rugby union)、ラグビーリーグ (rugby league) の3種類のラグビーが存在する。今回観戦したラグビーリーグは13人制で、密集プレーを省いた最もスピーディなプレーが特徴とされている。実際、密集プレーがなくランニングプレーが中心であるため、選手たちは通常のラグビー選手と比較して、全ポジションでよりスリムな体型であった。試合展開は非常に速く、激しい身体接触も頻繁に見られ、予想以上にエキサイティングな内容であった。参加学生からも、試合の面白さに関する肯定的な感想が多く聞かれた。ハーフタイムには子どもたちの試合が実施され、観客には家族連れや女性が多く見られた。このことは、ラグビーがオーストラリアの国民的スポーツとして広く受け入れられていることを示唆し、オーストラリアにおけるラグビーリーグの文化的位置づけと、女子プロリーグの発展を示すものである。特に、女子スポーツの普及と発展が顕著であり、これはオーストラリアのスポーツ文化における重要な特徴と考えられる。

ラグビー観戦後、夕方シドニー市内のホテルにチェックインし自由時間となった。



写真24 ハーフタイムには招待された小学生が試合を行っていた

### 3.8 実地研修 7日目 (9月16日)

7日目は、終日自由時間とした。学生たちは個々の興味に応じて、ショッピングやコアラが観察可能な動物園の見学など、多様な活動を行った。この自由行動は、参加者の主体性を尊重し、個別の文化体験を促進する目的で設定した。しかしながら、この自由行動日には複数の問題が発生した。まず、空港への出発時間に遅刻する学生が続出し、団体行動の規律維持に課題が生じた。さらに、出国手続きの際には、一時迷子になる者や、手荷物に入れた飲料水などが没収されるなど、国際旅行に関する基本的な知識の不足が露呈した。これらの問題は、参加者の海外経験の蓄積による慣れが、逆に団体行動からの逸脱や独断的な行動につながった可能性を示唆している。自由と自己中心的行動の境界線を明確に認識させることが、事前研修を含めた今後の課題として浮き彫りとなった。今後の研修では、参加者の自主性を尊重しつつ、団体行動の規律を維持するための効果的な指導方法や、事前研修のあり方について、さらなる検討が必要である。

### 3.9 実地研修日8日目 (9月17日)

定刻通り、東京羽田空港に到着し、入国手続きでは特に問題なく無事に研修を終えることが出来た。

## 4. まとめ

最後に、オーストラリアでの短期海外研修の成果と課題について総括する。

#### 【良かった点】

- ・異文化コミュニケーション能力の向上：  
オーストラリア人の寛容な態度により、学生たちの英語でのコミュニケーション意欲が高まった。
- ・スポーツを通じた文化理解：  
パークランやラグビーリーグ観戦を通じて、オーストラリアのスポーツ文化を直接体験できた。
- ・多様な学習機会：  
ニューカッスル大学での講義、野生動物保護区訪問、現地学生との交流など、幅広い学習体験を提供できた。

- ・ポジティブな異文化体験：

オーストラリアのホスピタリティや、スポーツイベントでの明るい雰囲気、学生たちに肯定的な印象を与えた。

- ・主体的な学習姿勢の醸成：

研修が進むにつれ、学生たちの積極的なコミュニケーション姿勢が観察された。

#### 【改善すべき点】

- ・時間管理能力の向上：

自由行動日におけるホテル出発時間の遅刻など、団体行動の規律維持に課題が見られた。

- ・国際旅行に関する基礎知識の強化：

出国手続きでの問題発生など、海外渡航に関する基本的な知識の不足が露呈した。

- ・自由と責任のバランス：

滞在による慣れが、独断的な行動につながる傾向が見られた。

- ・事前研修の充実：

団体行動の重要性や、海外渡航に関する基本的なルールについて、より詳細な事前指導が必要である。

- ・リスク管理の強化：

自由行動時の安全確保や、予期せぬ事態への対応策をより具体的に準備する必要がある。

結論として、本研修は学生たちに貴重な異文化体験と学習機会を提供し、全体として成功を収めたと評価できる。しかしながら、団体行動の規律維持や、海外渡航に関する基礎知識の強化など、いくつかの改善点も明らかになった。今後の研修では、これらの課題に対応するための具体的な方策を検討し、より効果的な海外研修プログラムの開発を目指す必要がある。

#### 参考文献

- 1) 関根政美：多文化社会オーストラリアのシティズンシップ・テスト，学術の動向，14(10)：22-35，2009